掠奪した短刀

田中貢太郎

松山寛一郎は香美郡夜須の生れであった。寛一郎は元治元年七月二十七日、当時土佐の藩獄（はんごく）に繋がれていた武市瑞山（たけちずいざん）を釈放さすために、野根山（のねやま）に屯集した清岡道之助一派の義挙に加わろうとしたが、時期を失して目的を達することができなかったので、それ以来自暴自棄（やけくそ）になって、毎日のように喧嘩（けんか）ばかりして歩いていたが、そのうちに慶応四年となって、鳥羽伏見の役が起り、板垣退助が土佐の藩兵を率いて東上した。寛一郎もその旗下に属して、迅衝隊（じんしょうたい）の隊士として会津へ往ったが、会津城が陥った夜、会津藩士の家へ押し入ったところで、一人の婦人が自害しようとしてい

た。見ると婦人の手にした短刀が立派なので、慾心がきざした。で、血で短刀を汚(けが)さないうちにと思って、いきなり婦人を斬り殺して短刀を掠奪した。

そのうちに東北が平定して官軍も凱旋(がいせん)した。寛一郎もひとまず江戸へ引きあげ、それから翌年になって故郷へ帰ったが、世間も静(しずか)になり、世の中もかわって来たので、いよいよ故郷に落ちつくことにして、家を建て、細君ももらって新しい生活に入った。

処(ところ)で、その翌年の夏になって、不思議なことが起った。それは某夜(あるよ)、夫婦で床に就いて、細君は早く眠り、寛一郎一人がうつらうつらしていると、どこからとも

なく火の玉が来て、蚊帳（かや）の上を這いだした。寛一郎はもとより剛胆な男であるから、嘲笑（あざわら）って見ていた処で、すぐ火の玉は見えなくなった。朝になって蚊帳を調べて見ると、火の玉の這ったと思われる処が黒く焦げていた。

寛一郎はちょっと不思議に思ったが、大して気にもかけずにいた処が、その夜になって壁厨（おしいれ）の中から短刀が飛出して来て枕頭（まくらもと）へ立った。その短刀は会津から掠奪して来たものであった。寛一郎はおやと思って眼をやった。同時に寛一郎の眼が覚めた。寛一郎は夢を見ていた処であった。

怪異はまだ続いて、その翌晩は短刀が飛び出して来て胸を傷つけた夢を見た。同時に痛みを覚えるので、灯（ひ）を点（つ）けてみると、そこに傷が出来て血が出ていた。

短刀の怪異は、それから白昼にも起るようになった。短刀が飛び出して来て、体に当るような気がするとともに、そこに痛みを覚えて傷が出来、同時に血が出るのであった。

「女の祟りじゃ」

さすがの寛一郎も弱ってしまって、高知市の東北になった陽貴山（ようきざん）へ往ってそこの和尚に、

「何とかして、封じてもらいたいが」

と云って頼んだ。和尚は承知して、寛一郎の家の後へ小さな祠を建てさせ、その中へ彼の短刀を納めさしたところで、それからは何の異状もなくなった。そして、後に寛一郎が歿（な）くなった時、家人が祠を調べてみると、短刀は無くなっていた。

底本：「伝奇ノ匣6　田中貢太郎日本怪談事典」学研M文庫、学習研究社
　　　2003（平成15）年10月22日初版発行
底本の親本：「新怪談集　実話篇」改造社
　　　1938（昭和13）年
入力：Hiroshi_O
校正：noriko saito
2010年10月20日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、

校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。